

## 第三〇回大会に参加して

大沼盛男

村研第三〇回大会が、くしくも第一回大会のゆかりの地、仙台で開催されるということで、紅葉には未だ早い中秋のみちのくを訪れた。私は実の所、村研に入つて日が浅く、一九七九年の糠平大会からで、全国大会参加はこれでわずか二度目である。したがつて新入会員が大会の感想を述べることには、私自身、大きなたじろぎと抵抗があることを認めないわけにはいきません。それを敢えてお引受したのは、私が糠平大会で「農村自治——その制度と主体」の課題報告をして帰札した翌月、所属していた北海道立総合経済研究所が行革の名の下に廃止通告を受け、その後、全国の研究者の方々、とりわけ村研の会員各位から大きな支援を戴いたとの御礼も申し上げたかったからです。それと村研第六回大会の開催地鳴子町は、私が戦後間もなく旧制高校に入るまで過した故郷で、今回墓参も兼ねていたため、討論に十分参加できなかつた点を詫びたいと思つたからです。

大会の感想を先どりして述べれば、「農地改革」論議を中心とした第一回大会の共通論題が、戦後三十数年の農村・農民の変貌と村研三〇年の研究課題と見事に重なり合つて、今なお、原点となつて現代的に問い合わせす必要を提起した大会ではなかつたかと思われることです。以下、主として第二日以降の課題報告のうち、関心のある御報告に限つて感想を述べたいと思う。

はもはや村落共同体そのものではなく、小商品生産者としての小農が形づくる社会関係、の変容過程としてとらえ直す視点から、その具体的領域を行政区・村落・六親譜の三局面におき分析を試みる。対象地区は地主制研究の宝庫でもあった宮城県南郷町であり、うえの三局面の内在的な変容と関連を明治期の資本主義確立以降、国家独占資本主義形成期の戦時体制期に及ぶ長期に亘って克明に分析する。そして、近世村の解体・変質から生ずる行政的村落II区と村落独自機能としての部落が、いかなる結合と分化の過程にあたかを、村落の行政機能・共同機能・秩序支配・生活構造という多次元の変質過程と対応させて論述した。その上で、今日の集落の結合原理は、経済的には自作農主義の商品生産、政治的には新憲法に基づく民主主義・生活的には協同組合主義に支えられる結論づける。

第二報告の高山隆三氏は「戦後日本農業の経済的枠組」と題して、今日の農業問題の基底に食糧自給率低下の構造を挙げ、その近代資本主義諸国間の比較研究をベースに、今日の農業矛盾を、自由な商品生産者としての農民の形成が、国独資的市場編成、価格政策メカニズムによってゆがめられる構造に起因すると指摘する。それは米に代表される現代的価格形成の必然的帰結として、食管、補助金等の非市場経済的な政策と結合して、今日の農民は本来商品生産者であるべきものが価格主導をとりえない性格に押し止められ、その限りで「むらは生きているような形」にあると述べている。さらに基本法農政における自由化の無批判な導入、その下で展開する稻作・畜産をめぐる矛盾を農法論的に如何に修復し、地域農業の自立的発展をいかに求めるかは、今日の農業危機の構造にお

いてこそなお検討されるべき課題であると結んでいる。

川口諦氏の報告は、農総研グループが一貫してとり組んだ酒田市近郊の豊原村調査から本百姓を起点とする農民層の動向を、商品経済の滲透、在来農法の堅持、土地所有関係における村の管理に及ぶ広い範囲から追求している。その中で時間的・空間的分業の統合体としての農村社会が、季節・世帯循環の生活形式と生活における自己規制と社会規制をくぐり抜けながらも静かに持続するなりわいを強く訴えられた報告であった。そして今日の庄内農村は「国の農業行政の中で無視すべき零細農家も村の社会生活では自治村落の公権的機能に対して一家一業的な法的平等を尊重され」、「階層分化の一途の進展の中でも、なお家の維持・再生産のメカニズムはゆるぎなく機能している」と結論づけている。

二日目最後の蓮見音彦氏の「村落と村落論——その推移と課題」は、村研三〇年の研究軌跡の上に立ち、村落の抱える課題と村研課題との位置を明らかにしようとする、いわば総括的報告であった。氏は「自営小農の形成する地域的連帶としての農業村落II消費生活・経営単位としての二重の意味での連帯が、いかなる契機と展開を経て、今日の農村社会の特質を規定づけ、その可能性が与えられるか」という問題意識から出発する。今日、農村社会に多様化して現われる「管理化」に対して、民主的組織化を対置し、小農の自己防衛と農村をとりつむ多面的諸階層の協力、協同関係の必要性を提起し、そこに展望を求めている。

総じて、日本資本主義の展開に伴って、農村の変貌が克明に論ぜられ、今日の農村と農民の性格が、いかなる歴史的契機を経て形成され、それが農村の構造といかに関わっているかを一貫して追求する論調の大会で

あつたといえる。その底を流れるものは、今日の農民像が多様化し、現代的視点のみで截ることは多くの誤謬を生む危険があるという視角が重要であることを物語っているように見受けられる。その意味で、戦前と戦後を画した農地改革後の農民に胚胎している商品生産者的側面と自営農的性格の二重の刻印が、戦後資本主義の畸型的な蓄積と再生産に巻き込まれる諸関係の究明が今日なお深化させる必要を痛感させる大会であった。冒頭に述べた第一回大会の現代的再評価をクローズアップさせたという意味で、三〇年という記念すべき大会に最もふさわしい内容であったといえよう。

とはいっても、戦後農民の把握において、各論者の認識にはそれぞれ独自性と格差があり、その資本主義への編入、政策プロセスへの包摶とその対抗という点で、もっとつきつめた議論がほしかったというのが実感である。

帰路の車中で、内山先生が「部落は死んだ化石か植物か」という発言や「農民の主体研究の前に研究者の主体形成が問題」という警句や、島崎先生の農民層分解論の今日的到達点に関する厳しい論評を衝撃に近い思いで刻み込みながら、故郷へ向った。